
死神の気紛れ

悲しみの樂園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の気紛れ

【Nコード】

N3123G

【作者名】

悲しみの楽園

【あらすじ】

多くの人が生を望む戦時中、世とは反対の希望を持つ自殺願望の強い少女がいた。不運にも彼女を愛してしまい、非力ながらも懸命に幸せを追う少年の、儂い残酷な物語。

記憶

時は1945年。

長く続いた第二次世界大戦は、ナチスドイツ軍の東部戦線での中央軍集団の壊滅により、誰もが終戦は近いと気付き始めていた。

激動の時代、誰もが生き延びたいと思っている世の中で一人の自殺願望の強い少女がいた。

少女は決して美しいとまでは言えないものの、整った顔立ちとさらさらと流れる金髪が魅力的で、この小さな村では変わり者という意味で有名な女の子となっていた。

「アイラ、起きなさい。起きなさいったら」

母が気持ち良さそうに眠っている私の肩を力強く揺する。

普段なら自分で起きて母が起こしに来るなんて事はないのだが、この日は少しばかり様子が違っていたようだ。

「どうしたの、ママ」

私は眠たい目をこすり、上半身だけを起こして周囲を伺う。窓から差し込む日差しが眩しく、今日は一段と風が強かった。

「アイラ、急いで着替えて。赤軍の先遣隊がワルシヤワを陥落させたと今朝ラジオで流れていたわ。もうじき国境を越えて、この村にも戦火が及ぶ」

「分かった、急いで支度する」

私は眠いのを我慢してベッドから起き上がり、パジャマのボタンを一つずつ外す。ベッドの隣に用意されてある可愛いピンクの服を着て、言われた通りに大切なものを部屋から集める。熊のぬいぐるみ、お父さんとお母さんの写真、それと着替えをたくさん鞆に詰め込み、力任せにファスナーを閉じた。

敵が近づいていると言う割には村全体が静かで、迫撃砲の音も、歩兵の銃声や村人の悲鳴も聞こえなかった。

「ママ、用意できたよ」

着替え終わって、母のいる部屋の隅へ振り向く。しかし、部屋から出て行ってしまったのか姿が見当たらない。

「ママ、かくれんぼしてるの？」

私は両手で鞆を持ち、部屋を出て一階に続く階段を下りていく。台所も居間も寝室もどこに行っても母親の姿が見あたらない。

おかしいと思いつながら、トイレの中やタンスの引き出しなど、人間が入らないような箇所まで探したが、人のいる気配さえしなかった。

「ママ、どこに行ったの？」

私の声が虚しく家の中を響き渡る。

唐突に家の玄関が開き、一人の男が入ってきた。白髪に度の強そうな眼鏡、高級そうな黒い帽子に、格好良く決まったスーツ姿で兵隊ではなさそうだった。ぱつと見た感じ、年齢60と言った所だろうか。

「お譲ちゃん、夢でも見てたのかね？」

顔中皺だらけのお爺さんが杖をついて私の方に近づいてくる。

「ママが、急にいなくなっちゃった」

私は特に警戒もせずそのお爺さんの元へと近寄った。お爺さんは一瞬驚いたように目を見開いたがすぐに優しくそうな顔になる。

「そうか、そうか。怖い夢でも見たんか」

ニッコリと微笑み、杖を持っていない方の手で私の頭を撫でた。

「この村の生き残りは、アイラちゃんだけだからのう。怖かったらうに」

「それって……どういう事？」

私はこみ上げてくる不安を堪え、恐る恐るお爺さんに聞いてみた。しかしお爺さんは困ったように顎の髭をさすり、だんまりとしてしまった。

ゲーム

「お爺さん、どこから来た人なの？」

私は思ったことを口にする。お爺さんは顔を顰めて少し悲しそうな表情を見せたが、すぐにまた元の笑顔に戻った。

「ワシの名はハルトマン。この村に少し用事があったね。ベルリンに行く前にここへ立ち寄ったのだよ」

「そうなんだ。この村はとても良い村でしょ。」

私小さい頃からここに住んでるけど、川の水は綺麗だし、小鳥やキツネは遊びに来るし、山が近くにあるから緑も多いし、とっても住みやすい所なの」

私はお爺さんが座れるよう木の椅子を用意して、暖炉にマッチを投げ入れた。お爺さんは律儀にも帽子を取りお辞儀をして、椅子に深々と腰掛けた。私も真向かいに同じ椅子を持ってきて暖炉の前に腰かける。

家の中とはいえ、この季節は雪が銀世界のように積もっていて、暖が恋しくなる。私は両手を合わせてその中に息を吹き込み、指の先まで冷たくなつた手を温めた。

「アイラちゃん、お化けとかは信じるかね？」

「信じてるよ。まさか、お爺さんお化けなの？」

するとハルトマンと名乗る紳士は椅子から落ちそうなほど高笑いをし、普段でさえ鋭い目をより一層細めた。

「こつやってまた会ったのも何かの縁だ。一つ話を伺って良いかね？」

「良いけど、私に分かる範囲なら」

「はっはっは、そんなに緊張しなくても良い。話というのは、将来の夢や希望とかを聞きたい。何かないかね？」

私は直感的に、この人が別の何かを知りたがっているのではないかと感じた。私自身なぜそう思ったのかは分からないが、この人は私

にあまり関心を持っていないような気がする。それにまた会ったというが、私はこの人とは今日が初対面で、全く面識がない。

「将来の夢はまだ決めてないけど、それがどうかしたの？」

私はチラリと窓の方を見て、雪が降り続けている外の天気には憂鬱になる。

この時期はシベリアからの冬将軍が来るから、氷点下20度にもなったりする。そうになると洗濯物は干せないし、私の好きなチョコレートも隣町まで買いに行く事が出来ない。

パラパラと雪が舞う程度なら村の友達と雪合戦でもして遊ぶ事が出来るが、そうなる事は滅多にない。大抵が外にも出れないほどの大雪で、いつまでも家の中に閉じこもってなければならぬ。それだけに雪は嫌いだった。

「将来の夢はないか。なら、今一番望んでいる事は何かかな？」

紳士は帽子の影で顔の上半分を隠し、薄気味悪く笑った。

「こんな事というと笑うでしょうけど、早く死んで楽になりたい。この世には嫌っていうぐらい束縛する法やルールが溢れている。私はそんな決まり事のない自由な生活を望んでいるの。その為なら家族も友達も恋人もいらさないわ」

家族？ お母さんを探しているのをすっかり忘れてしまった。

今頃私を置いてこの雪の中を赤軍から逃げているのかもしれない。

私は唐突に椅子から立ち上がり、玄関の古びたドアノブへと手をかけた。

「お譲ちゃん、この家から出てはいけない」

「でもお母さんが、雪の中に」

「我々のゲームはもう、始まっている」

私の声を遮るように紳士はそう言った。

ルール

「ゲームって？」

私は回しかけていたドアノブから手を離し、お爺さんの方へと振り向いた。

「まあ、詳しい説明をするからこっちに来なさい」

そう言うと杖を持っていない方の手で、手招きをする。私は吸い込まれるようにお爺さんの元へ歩いて行き、元いた椅子へと腰掛けた。お爺さんは席に着いたのを確認してから軽く咳払いをし、私の心を見透かしたような目でこちらを一瞥する。

「ルールを説明しよう」

私は心の底から込み上げてくる緊張を隠すように、愛想笑いを浮かべた。お爺さんはその様子を見て真紅の瞳を輝かせる。私の動揺を悟っているのかとても満足そうに見えた。

「このゲームは勝った方が負けた方の言う事を聞く」

「え？ いきなり話を遮って悪いけど、それって逆でしょ。普通は負けた方が勝った方の言う事を聞くんじゃないの？」

「まあ、最後まで聞きたまえ」

私は軽く叱責を受け、早くも醜態を晒した恥ずかしさから頬が赤く染まっていく。仕方なく、大人しく紳士の次なる言葉に耳を傾ける事にした。

「負けた方は勝った方にどのような命令を出しても構わない。ただし、プレイヤーのプライドを傷つけ放心状態に陥れる行為、命をとるようなゲームを続行できぬ状態にする行為、ゲームを途中で投げ出す行為は如何なる場合も認めない。

そして夜明けまでにゲームの黒星が多い、所謂負けの多いプレイヤーは命を絶ってもらう。自殺願望の強いアイラちゃんには持っているゲームだと思うがどうかね？」

「待って。ただお爺さんが一人でルールを決めたんじゃ、全然平等

じゃないわ」

「と言うと、何かハンデが欲しいのかね？」

私はお爺さんが見せた一瞬の隙について、自分が有利になるような内容を考える。

そもそもこの雪の中を家まで歩いてきたと言うのが矛盾している。

この村の地理をよく知っている人間ですら、雪の中は遭難するから出歩く事は滅多にない。

なのに、初めて村を訪れた杖をつかなければ歩けないお爺さんが一人でここまで来れる訳がない。それ程この村の冬は危険に満ち溢れている。

山々には狼や熊が出没し、凍った川はナチの親衛隊が重砲などを渡河するため、極度の緊張状態から一般人によく誤射する事がある。それにこの氷点下20度の気温。防寒着でも凍死者が出るのにスーツ姿で凍傷にならずに来れるような場所ではない。

そう考えると消えた母と入れ替わりに唐突に現れるこのお爺さん、どちらも不可解な現象である事は間違いない。

通常では起こり得ない事がこうも続くととなると、この命を落とすと言うゲームも単なるお遊びとは考え辛い。それだけに慎重に言葉を選ばなければならなかった。

「お嬢ちゃん、まだかね？」

紳士が待ちかねた様に、私の注文を催促する。

私はもう少し待ってくださいと頭を下げて、テーブルの上にあるポッドからお湯を入れ、体が温まるようにと二人分のコーヒーを作った。

「では、こうしましょう。ハルトマンお爺さんは私がゲームの途中で質問した事には必ず5分以内に答えてください。答えられなければそのゲームは、お爺さんの負けです。勿論、分からないは認めません。その場合、多少の嘘や過大話は認めます」

目の前の男はニヤリと笑い、コーヒーを手元に寄せた。

「良いだろう。では、ゲームの内容に入る。」

簡単に言うならば心理ゲームだ。お互い相手に見えないように紙に絵を書き、それを当てれば勝ちという極めてシンプルなものだ。勿論、それだけでは当てるのは難しいから交互にその絵について質問をしていく。ただし、一回だけ質問に対して嘘をつくことを認めるでは、絵を書き始めたまえ」

そういうと紳士は考える様子もなく、筆をすらすらと動かしていく。私はあまりにも余裕の表情を見せる紳士に手が振るえ、頭の中が真っ白となっていった。まるで、自分の心が冷たい手に掴まれているような感覚。

それでも恐怖心を噛み殺し、私は震える手を押さえて絵を描き始めた。

憶測

私はこのゲームで何を描いて、何を質問すれば勝てるかを考えた。確かに自殺願望はあったが、いざ死ぬとなるとどうしても抵抗がある。

それは人間として至極当然の心理である。

それならばこのお爺さんの思いつかないものを描き、その間にこの人の描くものを当てれば良い。何も難しい事ではない。

それに先程、ゲームの途中で質問をして5分以内に答えられなかった場合、無条件に勝てるというハンデも得る事が出来た。しかもこの質問については内容も回数も明言していない。

つまり、この状況を詳しく知る為の手掛かりとして活用する事も、お爺さんのゲームの妨害をする事も可能という事だ。それを考えれば安易に私の条件をのんだこの紳士は、完全に失態を晒した事になる。それだけにこのハンデは、このゲームの戦況を大きく変える切り札といえる。

「ワシは描き終えたが、お譲ちゃんはゆっくり描いて良いからね」紳士は筆と紙をテーブルに置き、背筋を伸ばした状態のまま私が描くのを待っていた。

私は初戦からこの紳士の裏をかくことに決め、紳士の似顔絵を描く事にした。

通常人間は、他人の方にはかり目を向けており自分の事を疎かにする傾向が強い。これは自分の事しか考えていない自己中心的な人間ほどその限りではない。

例えば、Aさんは自分が可愛くなりたいと思い化粧や流行の服を買い揃えたとする。一見、Aさんは自分を中心に物事を考えているようにも思えるが、それは大きな間違いである。

可愛くなりたいと思ったのは、自分の自発的な意思というよりも、他の友達が化粧を始めたからまたはアイドルがあので服を着ているか

らなどと真似ているケースが多く、そこに自分の個性と言うものは見出せていない。

分かりやすくもう一つ例を出そう。

高校3年生のB君は東京大学理科三類を目指し始めたとする。

東大の理三といえば、全大学学部の中で頂点であり入り口は非常に狭く、名門として名が知れ渡っている。この場合もB君は自分の意思で東京大学を目指しているようだが、それも大きな間違いである。通常、高校生の時点で自分がどうあるべきかなどと、悟りを開いている学生などまずいないと考えてよい。つまり、B君は自分に目を向けて医者になるうとしていているというよりも、地位や名誉に左右された社会や教師の勧め、両親の職業による影響を受けて志望校を決定していると見る方が自然である。

中には本当に自分の意思で進路を決定していると言う学生もいるだろうが、大学のパンフレットや先輩の情報で実際の学校を完全に把握する事は非常に困難である。そのような情報が乏しい状況下で志望校を決めた所で、果たして周りに流されず本当に自分の意思なのかといえば、疑問符をうたざるおえない。

長くなつたが、本当の意味で自分に目を向けていると言う人間は非常に少ないのである。だから私はそれを信じてこのお爺さんの絵を描く事にした。

勿論、似顔絵を描いているとは悟られないよう、お爺さんの顔を見るわけにもいかない。私は今まで見てきた印象を思い出しながら筆を動かしていった。

「描き終わつたわ」

するとお爺さんは窓の外から私の方に視線を移し、手に持っているコーヒーカップをテーブルに置いた。

「お嬢さんから私の描いた絵について質問をどうぞ。あ、後ハンデを使う時はちゃんと宣言をしておくね。会話の中のどの質問が時間内に答えなければならぬか、分かりにくいものでね」

「分かりました。では質問させていただきます。その絵を描いてい

る時、お爺さんは何を考えていましたか？」

憶測（後書き）

実はもう一つ作品を書いてるんですが、ライトノベルの新人賞に応募しようと思います。

普通に考えれば、1次落ち頑張ったで賞受賞予定ですが、何事もチヤレンジ精神が大切だと思い、応募を決めました。

語彙力に乏しい残念な私ですが、ヤル気だけは他の作者様に負けなように頑張ります。

結果については6月頃に報告いたします。では

見えるもの

「ほう、お嬢さん。随分と面白い質問をするね。普通、その絵は植物ですか？ 人間ですか？ 自分で動く事が出来ますか？ この部屋にありますか？ 凡人はそう質問をする。」

だから少しずつ的を絞っていく為、言い当てるまでに時間がかかる。しかしなぜアイラちゃんはそのような質問をしたのかね？」

「お爺さんはその絵を描く時、最初から何を描くか決めていたように迷いなく筆を動かしていたわ。言い換えるなら、描いている時は一つの事しか考えていなかった。」

それにこのゲームのルールでは質問に対して嘘を吐くのは一回までとなっている。例え、お爺さんが今回私の質問に嘘を吐いてその場を凌いでも、次の私の質問する番でまた同じ事を聞けば良い。そうすればどんなに長くても、私の二回目の質問でこのゲームを終わらせる事が出来る。」

しかも私はお爺さんと違い、何を描くか色々考えを巡らせていて、たくさんの事を頭に思い浮かべていたわ。つまり私と同じ質問をお爺さんがしても無駄という事よ」

私は自慢げに髪を靡かせ、お爺さんに対して勝利を確信したように笑みを浮かべた。しかし目の前の男はふっと笑うように息を漏らし、嘲笑うかのように私を見据えた。

そしてお爺さんは静かに目を瞑り、何かを考えているように押し黙ってしまった。

2分3分と時間が流れていく。時計の針の音が大きく聞こえ、その待ち時間の長さが少しずつ私の絶対的勝利という自信へと繋がっていく。

5分は経つただろうか、沈黙を破ったのは紳士の方だった。

「お嬢さん、この戦争が終わったらどうするつもりだい？」

お爺さんが私の金色に光る瞳を覗き込む。その目はどこか寂しそう

にも見え、そのあまりの豹変振りに、私はどうしたものかとたじろいでしまった。

「分からないわ。それよりゲームの方はどうするの？ 負けを認めるの？」

相手の紳士に情けをかけないように、威圧的な態度を取る。

しかし私に睨まれているのもお構いなしに、お爺さんはテーブルのコーヒーを手に取り、

慣れた手つきで口元へと運ぶ。

「負けは認めんよ。お嬢さんが随分と憐れに感じてしまっただ。描いている時はアイラちゃんの事を考えていたよ」

「分かった。私の絵を描いていたんでしょ？ 当たり？」

「残念だね」

お爺さんは感情を出さない機械のように、無表情で淡々と受け答える。私はまたお爺さんの余裕が戻ってきた事に一つの疑問を抱かざるをえなかった。

私の読みは本当に正しいのか？

「突然だがお嬢さん、今日の天気を教えてくれるかね」

私は心の中で渦巻く不安を抑え、ゆっくりと胸に手を当てる。大きく息を吸って緊張を解そうとした。

「大雪よ」

それを聞いてお爺さんは勝ち誇ったような笑みを向けて、私に告げた。

「ワシには澄み渡った青空に見えるよ」

紳士と少女

私はこのお爺さんの言おうとする事が全く理解できなかった。どう見ても大雪が降っているのに、目の前の男は澄み渡った青空だと告げた。

私と紳士が見ているものは違うのか？ それともこの男は私の動揺を誘っているのか？ 様々な考えを巡らせて、やがて静かに目を開けた。

「お嬢さんには見えなんでしょう？ 雲一つない青空が」

紳士は余裕の笑みを浮かべ、私を挑発するように身を乗り出してくる。

「見えないわ。私には」

ひんやりとした冷たい風が足元に運びこまれてくる。それが自分の見ているものに間違いはないと、今一番求めている安心感を与えてくれた。昂っていた気持ちを少しずつ落ち着かせ、緊張を解すように深く息を吸う。

「ではきつと、これも見えなんでしょうね？」

そういつと私の肩を杖でポンツと軽く叩いた。私は淡々と語るお爺さんを威圧するように睨みつけ、軽蔑の眼差しを向けた。

それを肯定と捉えたのか、目の前の紳士が唇の端を歪ませ、嬉しそうに微笑んだ。

「アイラちゃんの横には、心配そうに見守るお母さんがいるね」

「嘘よ」

「なぜ、そう思うのかね？」

私は押し黙ってしまった。確かに他人が見えているものを、自分も見えるとは限らない。この世の物理法則では見えないものが見えるとは有り得ない事だと思っても、それを確かめるすべがないからだ。

世の中には絶対には絶対はないと思うような事がいくくらでも起こり得る。

大半は嘘や錯覚なんだろうが、それにしても他者が否定できる事ではない。

つまり、この世に絶対という事がない以上、目の前の見えるものには理解できない者は、所詮流されるだけの人間である。私はそういう人間が最も嫌いだった。だがら自己嫌悪に陥って自殺願望が芽生えた。

しかしその自殺願望をここまで育てたのは別の何かではなかったろうか？ 確か、何か大切なものを失ったような気がする。思い出せないがその出来事が私を漆黒の闇へと引きずり込んだ。

「お譲ちゃん、君にはお父さんがいた筈だが、今はどうしているのかね？」

私は何かを思い出したようにはっと息をのんだ。そして恐ろしいものでも見るように目の前の男を見据えた。

「やっと思い出したか、アイラ」

紳士と少女（後書き）

更新についてですが、私が今年の春から大学3年生となり就職活動
を始めるので、これから週に1度程度にします。
ご理解の方お願いいたします。

戦局（前書き）

前作までの話の流れを忘れてしまった人の為に

第二次大戦末期に一人の自殺願望の強い少女が居た。

ある日の朝、戦況の悪化に伴い母から叩き起こされるも、忽然と彼女の前から姿を消してしまった。

そしてそれと入れ替えるように、一人の紳士が家の中に現れる。

紳士はアイラにゲームをするよう提案し、二人は絵を描き始める。

しかし紳士の発言には不可解な点が多々見受けられ、少女は、この紳士とは見ているものが違うのかと疑問を持ち始める。

ゲームのルールを忘れてしまった人の為に

双方が絵を描き、交互に質問をして当てる事が出来れば勝ちとなる。

負けたものは勝ったものに命令を出せる（常識の範囲内）

ゲームを何回かし、負けの多いものは命を落とさなければならない。

特別ルール

アイラの提案により追加された。

ハンデを使うことを明言すれば、

アイラの質問に、5分以内に紳士は答えなければならない。

もし答えられなければそのゲームは負けになる（回数と内容は自由）

戦局

私はやっとこのゲームを開催した、紳士の事を思い出した。

今から2年前の1943年の秋に、私の父は戦場に赴く様徴兵令が出されていた。当時の戦局は、ドイツ軍が破竹の勢いで赤軍を押し、キエフとミンスクは陥落。レニングラードの包囲も完了し、モスクワまで数十kmの地点まで進撃を進めていた。

父はこの戦争の勝利を確信し、私も母もそれを疑わなかった。

しかし戦局の悪化に伴い、父はブルガ川近郊の都市スターリングラードで消息を絶つたと、私たち家族の元に電報が入る。

私は父が行方不明となったことに、言葉では言い表せないほどの衝撃を受けた。それ以来感情が希薄になり、何事にも関心を見出せないでいた。

それだけ私の心の中では、父は大きな存在だった。

私の記憶では戦場に向かった父はまだ30にもなっておらず、この紳士とはあまりにも年が離れすぎている。しかしその鋭いような細い目や、整った頬のライン、褒める時に見せる優しそうな笑顔は、2年前に戦場へ飛び立った父とそっくりだった。

そんな時、玄関の扉が再び来訪者を告げた。見た限り私よりも幼い、2人組みの女の子だった。

一人は三つ編みに透き通るような白い肌で、背は私より少し低いぐらいの、とても可愛らしい子だった。

しかしどういふ訳か、もう一人の少女は顔が黒く塗りつぶされていて、表情が見えなかった。まるで顔だけ影がかかっているようで、あまりの薄気味悪さに直視する事が出来ない。

その二人は私と紳士の所まで歩いてくる。

可愛い笑顔の女の子が紳士の横に立ち、顔が影のように黒い女の子が私の横に立った。まるでこの先のゲームの展開を予知しているようで、不安や恐れが一層、心の底から込み上げてくる。

「ハンデを使わせてもらおうわ。一つ質問を良いかしら」

「どうぞ。好きなように質問したまえ」

紳士は余裕があるのか、随分とご機嫌な様子だった。私はこの紳士の憎たらしい笑みを、今直ぐにでも切り裂いてやりたいと思った。「私と母が見えるのよね？ 特別に貴方のお遊びに付き合っただけ。他に何人見える？」

すると男は口を緩ませ、私の目の前に一本の指を立てた。

「それは男？ 女？」

「わからないね」

「服は女の子だけど、顔がないから分からないって事？」

「ほう、それは見る事が出来るのかね」

紳士は感心しているようで、満足そうに微笑んだ。私はこの紳士が言っている事は妄言ではなく、事実なのではないかと思い始めていた。

「お母さん、私の傍にいるの？ いるなら私を助けてよ」

不安に押し潰されそうになって、思わず叫んでしまった。しかし、答えてくれるものはなく、静寂が嘲笑うかのように、私を包み込む私の精神状態はすでに限界を超えていた。

「さて、次はワシがアイラちゃんに、その絵について質問する番だね」

紳士が目を細め、私の書いた紙を見やる。その目は真剣で、自分の描いた絵が見透かされているような感覚だった。

「ほう、なるほど」

紳士は10秒程眺めてからそう呟くと、絵から私の方に視線を移した。私は動揺しているのを悟られないよう、出来る限り平然を装った。

「その絵についての質問は、するまでもなかるう。ワシの絵を描いたのだらう」

私はそれを聞いて目を大きく見開き、はっと息をのんだ。質問さねずに当てられた？

「どうして、どうして分かったの？ 何で何も質問をしないのよ」とすると紳士は滑稽なものでも見るかのように、私に一瞥を与えた。あまりにも威圧的な態度に、私は思わず言葉が出なかった。

体をガタガタと震わせ、冷や汗が頬を流れるように伝う。目の前の男を睨みつける気力もなく、ただ呆然として、ショックで視点が定まらなかった。

戦局（後書き）

たった今初めての長編を書き上げ推敲も2、3回通しました。

正直に今の気持ちを話します。新人賞に応募すると決意したものの、5年10年書き続けているベテランの作家達と戦う事を考えれば、心の中に怖いという気持ちがある、というのが本音です。

しかし諦めたらそこで終わり、私はそう思っています。

白夜行でも有名な東野圭吾さんも、10回以上文学賞に落とされても、書き続けていたから今があるわけですし、ひぐらしのなく頃にの竜騎士さんも、0の状態から同人活動を始めて今があるわけです。

私も何十回と賞に落ち続けるかもしれませんが、つまらないから諦めると言われるかもしれませんが、ですが必ず、栄光を掴み取って見せます。

近いうちに自分の書いた原稿を郵便局に持って行きます。

倍率を見れば十中八九ダメかもしれませんが、でも、200枚を越す長編を書き上げる事が出来たのは、他ならぬ読者の皆様のおかげです。結果については出次第、報告いたします。そしてこの場を借りて、感謝の言葉を言わせてください。

本当にありがとうございます。明日から気持ちを切り替えて、また1から作品を書き上げていきたいと思えます。

ゲームの共通点と相違点(前書き)

ここから解決編に入ります。

ゲームの共通点と相違点

「何も質問していないのに、どうして私の描いた物が分かったの？」
目の前の男に当然の疑問を投げかける。

すると紳士は顔を歪ませ、

「ワシはこの世界で言う、未来から来た。

だからアイラが何を描いて、何を質問してくるか全部分かった」

おじいさんは淡々と告げる。表情はいつもの真顔に戻っており、

目は真剣そのものだった。

私はあまりそういう話を信じない口だが、あえてこの人の話に耳を傾ける事にした。ゲームの全容や知識が不足しているため、どんなにあり得ないと思う話でも、この狂った戦いの世界では、貴重な情報だった。

それに私にはかつての自殺願望が薄れ始め、今は生きたいという気持ちが強くなっていった。私はこのゲームに勝ちたいのだ。勿論、代償としてお父さんの命を、自分が奪う事になるかもしれないという事は分かっている。

しかし、躊躇いはなかった。ただ単に実感が湧かないからだろうか。本当はこのゲームは、ただのお遊びのような気がする。お父さんを殺すという感覚がない。

実際私の知っているお父さんと、この紳士はあまりにも容姿がかけ離れている。あらゆる非現実的な出来事が、私の父親殺しという感覚を麻痺させた。

「お爺さんは、私のお父さんなんだよね？」

「ああ」

間髪入れずに老人が答える。

私は殺そうとしている相手が、お父さんではないと否定して欲しい気持ちと、またお父さんに会いたいという一心での肯定してほしい気持ちがあった。その為、心の中で激しく葛藤する。

「じゃあ、あの戦争をお父さんは生き延びたということ？」

私は行方不明になっていた父の生死を知りたかった。その為なら、この老人の戯言にも聞き入れる事が出来る。

「そうだ。」

長い年月拘束された後、ソビエト軍から解放されて、やっと故郷に戻ってきたのだ。

そしたら村の人間は全滅だった」

紳士は悲しそうな目を向けて、私に言い放った。その姿が、ゲームに無関心な私の心を痛ませた。

この男が父親かどうかは証明できない。しかし、目の前で命をかけて戦う相手は、死神でも魔物でもない。私と同じ人間だ。

ふと、二人の少女に目を向ける。私の傍にいる顔の潰れている女の子と、紳士の傍にいる明るい女の子。

紳士、いや、お父さんは一人の女の子しか見えていない。顔の潰れている子しか見えないと言った。

私は考える。私には二人の女の子を見ることが出来る。しかしお父さんには、一人しか見る事が出来ない。

そして私には母親が見えない。お父さんには見える。

何かが閃いたように、思わずはっと息をのむ。私はこのゲームの仕組みを、ついに見破る事が出来た。

生者と死者

私は、ゲームの仕組みを見破る事は出来た。

しかし、それを目の前に居る男に、堂々と口にする事は躊躇われた。

「どうしたのかね？ 急に押し黙ってしまった」

紳士は怪訝そうな顔をし、自分の不満を表現するように悪態をつく。

しかし男の威圧的な態度に気にも留めないうで、自分の考えをもう一度整理した。目を瞑り、大きく息を吸う。冷たい空気の塊が私の胸いっぱいに広がり、ゆっくりと吐き出された。

その動作を数回繰り返し、やがて重く閉ざされた口を、静かに開いた。

「貴方、いや、お父さんの言っている事は全て信じる。だから私の推理を一つ聞いて欲しい」

「ほう、良いだろう。続ける」

紳士は表情を崩し、私の発言に少しばかりの興味を持っているようだった。先程の不機嫌そうな様子から一変し、落ち着いた雰囲気を感じ取れる。

「お母さんを含め、村の人間は全員死んだと、お父さんは言ったわ。もし本当にお母さんが死んでいるのなら、お父さんは死者を見る事が出来る。」

そしてお父さんには見えないのだろうけど、横にもう一人、笑顔の可愛い女の子が立っている。その子を見る事が出来ないというのは、お父さんには生者を見ることが出来ない」

私はここまで、息も吐かずに言い切る。少しずつ続ける言葉が怖くなり、目の前の男を直視できないでいた。

視線を泳がせ、窓の外を見る。紳士は澄み渡った青空と言ったが、私には相変わらずの吹雪にしか見えない。

「だから？ 何だね？」

紳士が続きを諭す。私は未だに話を続けて良いのか、困惑していた。

このゲームにおいて、最後まで真実を話すということは、全てを終わらせるということだ。

しかし、いつかは前に進まなくてはならない。だからその迷いを断ち切る為にも、大きく首を横に振った。

「お父さんは生者が見えなくて死者が見える。それは二人の女の子とお母さんで証明済み。」

つまり、貴方に見えている私は、死んでいるって事よ」
自分でも認めたくない、戯言だった。

対する私は、横に立ちつくしている顔の潰れている死者と、父の隣で笑顔を向けている生者を見ることが出来る。つまり、生きている人間も死んでいる人間も見える。だから目の前にいる父と名乗る男が、生きているのか死んでいるのか判別がつかない。

生者と死者、両方を見ることが出来るからだ。

ただ、この推理には一つの謎が残る。死者である母が、私には見えない事だ。本来なら見えるはずだ。

だが、紳士と二人の少女しか、目の前に居ない。

「話を続けるわ。このゲーム、負けたほうが命を絶つことになっている。」

でも」

紳士はもう、私に続きを諭さない。認めたくない現実が目の前にある。それから目をそらすように、ゆっくりと窓から足元へと視線を移した。何も抗えない悔しさから、唇をかみ締め、静かに俯く。

「でも、私はもう命がないのなら、このゲームで負ける事はない」
淡々と目の前の男に言い放った。

すると紳士は、私を嘲笑うかのように笑みを浮かべる。そして私にも聞こえるように、ふっと息を漏らした。

顔を上げ、男を見やる。今言った事を、全て否定して欲しい一心

で、父を見た。

「違うね。面白い読みだったが、それでは八十点しかあげることが出来ない」

紳士はゆっくりと椅子から立ち上がる。そして杖をつき、私の方へと一歩一歩近づいてくる。その様子は危なっかしくて、今にも倒れてしまいそうだった。

考えれば考えるほど、苦しくなる。苦しみから解放されたい為に、私はもう何も頭に思い浮かべない事にした。ぼうつとした目で、ゆっくりと歩む紳士の姿を追う。

やがて手の届く位置まで男は近づいてきて、椅子に腰掛けている私を見下ろした。その鋭い視線から目をそらすように私は顔を傾けると、すぐそこにいる顔のない少女に目がいった。

私の隣で立ち尽くしている少女も、紳士に視線を集めているようだった。確かに顔はないが、顔の向きからお父さんに注目しているように思える。

二人の歪なものに囲まれて、私は空気の重さから、思わず吐きそうになってしまった。背中を丸めて、大きくむせ返る。手で口を押さえるも、咳は止まらなかった。

勝敗

「アイラ、お前はこのゲームの趣旨を、間違つて理解している」

話しかける男を横目に、私は咳き込む口を手で覆った。そして徐に顔を上げると、軽蔑するように見下げる父の姿が目の前にあった。

私はすでに死んでいる

これが、八十点の解答と言うならば、残りの二十点は何なのか？
最初は興味の色を示したゲームではあるが、出来る事ならこれ以上、この戦いには関わりたくないと感じた。

現実を受け入れるのが怖いのだ。

私はある程度喉の痛みが落ち着いてから、続きを諭すよう視線だけで訴えかけた。肌寒い空気が、今では嫌悪の対象でしかない。

呼吸を整えるように白い吐息を吐きながら、上目遣いで敵を見や
つた。

「アイラはすでに、自分は命を落としていると言った。この過程から間違っている。正確には命を落とす瞬間に居ると言った方が正しい」

「どういう事？」

私は息つく間もなく口を挟んだ。

しかし男は、それを無視するように言葉が続ける。

「このゲームは、敗者の命を奪う事を目的としているわけではない。それが分からないか？」

私は考えるような仕草をとったが、パツと閃く筈がない。そもそも分からないから回答を促している。私が答えを知っているのならば、わざわざこの男に聞くまでもない。父の問いは、明らかに愚問であった。

「よく考える。アイラは生と死の狭間で止まっている。なぜ死なな

いのか？ 簡単だ。このゲームに参加しているから、死んでいないのだ。それにどこの父親が、娘の命を奪うためにこんな手のこんだ事をする？」

冷めた口調で言い放つ。父の目は、すでに悲しみの色を帯びていた。

私はその様に釘付けとなり、呆気にとられて声を発する事も出来ない。なぜならこのゲームの趣旨を、ようやく理解したからだ。

「お父さんの言おうとする事は大体分かった。このゲームは敗者の命を奪うのではなく、勝者の命を助ける為に行われているのね。一人の命を救う代償として、一人の命が捧げられる」

「そうだ」

お父さんは間髪いれずに、大声で告げた。

「ワシは娘の命を奪うために、このゲームに参加したわけではない。娘の命を助けるために、最初から負けるつもりで挑んだのだ」

私はあまりにも意外な結末に愕然として、ぽかんと開いた口が塞がらなかった。何か言わなければならぬ。そう思いつつも、上手く考えがまとまらない。視点が定まらず、呆然とお父さんを眺めていた。部屋の中が絵の具で塗られたように歪んでいく。

それでも朦朧とした意識を取り戻すように、自我を保とうとする。嫌だと叫びたくなる気持ちを抑えて、膝に乗せている手に力を入れた。

「でも、お父さんは本気で勝負を挑んでいた。確実に私を殺しに来た」

突発的に頭に浮かんだ疑問をぶつける。

「ゲームが終われば、ワシは死ぬ。だから、アイラと少しの間でも良いから、こうして傍に居たかった。例え娘を脅かすような真似でも、それしか方法がないのなら、仕方がない事だった。それにもう真実を知ってしまったのだから、ここに長居をする必要はないだろう。扉の向こうの世界へ行って、自分の目で現実を確かめろ」

そう言って、真っ直ぐに玄関を指差した。気がつく、私は目頭

が熱くなっていた。顔の曲線をなぞる様に、一筋の涙が頬を伝う。私は何かを決心したようにゆっくりと椅子から立ち上がり、一度もお父さんの方を振り返らないで、現実の世界へと歩いていった。ドアノブに手をかけると、黄土色にくすんだ扉は、胃が痛くなるような軋む音をたてながら開く。

扉の向こうからは眩しい白い閃光が幾重にも放たれ、私を明るく出迎えてくれた。

「やっと来たか」

澄み渡った青空の下に、一人の少年が立っている。目の前には何処までも草原が続いており、残雪は見られなかった。陽が辺りを焼き尽くすように輝いていて、蝶々が楽しげに花の合間を舞っている。私が居た村はどこにもなく、所々に瓦礫や煉瓦が転がっている。それに動かなくなったのか、錆びた戦車も捨てられていた。

ドイツ軍の物ではなく、見慣れない車体だった。

その場で一回転するように周囲を見渡した後、目の前の少年に視線を集める。

少年は私と同じくらいの背丈で、年も近そうだ。凜とした瞳は大きく、鼻も高い。それに滑らかな頬のラインが綺麗で、整った顔立ちである。

美少年であった。

「我が名は死神。ずっと君の事を見ていた。このゲームの主催者とも言うべきか。君の代わりにあの男の命、確かに授かった。最初から勝敗は決まっていたのだから、さつさとけりをつければ良かったものを。あの男は僕に、娘を助きたい一心で頼ってきた。対戦者の父親の負けは、ゲーム開始時から決まっていた」

少年は誇らしげに告げる。私は突きつけられる現実に、自我が壊れてしまいそうなほど心が痛かった。

このゲームを仕組んだのはこの男でも、お父さんを殺したのは私だ。

「そういえば、最初にお父さんと会った時、村の人間は全滅したと

言っていた。私だけ生き残った事に、もう少し不審に思うべきだった」

私は一旦言葉を区切る。出来る限り感情を押し殺してここまで来たが、心はとうに限界を迎えていた。

「母はなぜ、私には見えなかったの？」

私は荒げる気持ちを抑え、目の前の少年に言い放つ。

「さあ？ 泣き崩れている親の姿なんて、見ない方が良い。気紛れだよ。それより、これから君はどうするの？」

少年は目を輝かせている。悪気はないのだろう。命を狩るのが仕事なのだから。

「お父さんの為にも精一杯生きる。それが私に出来る、せめてもの償いだから」

私は糸が切れた人形のように、その場に泣き崩れた。悲しみを共有してくれる人は、もういない。ほかならぬ私の手で、殺したのだから。

勝敗（後書き）

お疲れ様です。

ようやく完結いたしました。

途中で作者の勝手な都合により、周一にペースを遅らせてしまい、大変申し訳ないです。

読者が全滅する事も覚悟していたのですが、意外に見てくださる方がいて感激しました。

それと、別の小説サイトで、ライトノベルの新人賞選考落ちした作品がいくつか掲載されていたのですが、

「こ、これで一次落ちなのか？」

っていう作品ばかりで改めて現実の厳しさを……

とにかく修行を積まなきゃダメですね。次の作品は三人称神視点で恋愛物にしようかと思えます。まあ、何か近況があれば、作者紹介ページにでも書きます。

それではまた、お会いする日まで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3123g/>

死神の気紛れ

2010年10月28日08時19分発行